

第 145 回国際研修を終えて

主任教官 河原田 徹

1 はじめに

アジ研では、平成 22 年 5 月 12 日から同年 6 月 18 日まで、「第 145 回国際研修」を実施しました。研修参加者は、海外から 12 名、国内から 8 名の合計 20 名であり、すべて、警察、検察、裁判、矯正、保護などの刑事司法機関に勤務する実務家です。海外研修参加者の出身国は実に様々で、ブラジルから 2 名、コスタリカから 1 名、エルサルバドルから 1 名、イラクから 2 名、ケニアから 1 名、ネパールから 2 名、パプアニューギニアから 1 名、香港から 1 名（オブザーバー）、韓国から 1 名（オブザーバー）が今回の研修に参加しました。なお、日本人研修参加者の構成は、判事補 1 名、家庭裁判所調査官 1 名、検事 2 名、矯正職員 2 名及び保護観察官 2 名です。

2 研修の主要課題について

今回の主要課題は、『社会への再統合要因』の強化による犯罪者の効果的な社会復帰」でした。安定した住居の確保、基本的技能の伸長、就労支援、家計及び負債に関する指導等が、「社会への再統合要因」を強化する犯罪者処遇の具体的例として挙げられます。矯正施設や保護観察所で行われている犯罪者処遇の中で、最も基本的なものに当たると言えましょう。しかしながら、最近、こうした基本的な処遇が、再犯の防止に大きな影響を与えること、認知行動プログラムのように、広く効果が認められているプログラムの成否をも左右することなどが分かり、その意義が改めて見直されているのです。「ソーシャル・インクルージョン」という考えが広まったことも、こうした処遇が脚光を浴びるきっかけになったと思います。

ただし、「社会への再統合要因」を強化する処遇に対する取組の程度は、国によって実に様々です。果たして、様々な国々から来日した海外研修参加者すべてに、等しく意義のある研修を実施することができるのでしょうか。研修の担当者として、当初、私は、そこに大きな不安を感じておりました。

3 研修の概要

研修のプログラムは、主として研修参加者のそれぞれの国の状況についての個人発表、アジ研教官や我が国内外の専門家の講義、主要課題にかかわる機関や施設への見学、グループワーク等から構成されています。

今回は、我が国内外の犯罪者処遇に関する専門家を数多く講師として招聘するほか、刑務所、保護観察所、更生保護施設等、犯罪者の処遇を実施する機関や施設への見学を実施しました。しかしながら、今回の研修の主要課題を検討する上で、刑事司法分野以外の機関や民間との連携を視野に収めることも欠かせません。そこで、社会福祉にかかわる方々や NPO 法人で就労支援に携わる方、協力雇用主の方も講師として招聘しました。研修参加者が、こうした様々な分野の方々の講義に等しく熱心に耳を傾

けていたことが印象に残っています。また、「保護司国際研修」(注)の一環として実施される全国各地の保護司の方々との意見交換会も、今回の研修の主要課題に深いかかわるものでした。世界に類例がないとも言われる我が国の保護司の活動ぶりは、特に海外研修参加者の興味を引くようで、意見交換会で活発な質疑応答が行われました。例えば、保護観察対象者が保護司宅を定期的に訪問することに対し保護司の家族がどのような感情を抱いているかという質問に対して、ある保護司の方は、奥様が普通の客に接するようにお茶を入れ、談笑し、暖かく迎え入れるとお答えになりましたが、海外研修参加者の多くはそうした答えに驚きを隠せない様子でした。その後、私自身も、講義の合間や休憩時間に、保護司制度についての質問をしばしば受けました。

こうした多彩な講師や保護司の方々から提供された情報が、グループワークを推進する糧になったことは言うまでもありません。グループワークは二グループに分けて行われましたが、どちらのグループも、国によって刑事司法制度や犯罪者処遇の状況が非常に異なるため、当初、意見をまとめることに相当苦心したようです。研修参加者は、しばしば、夜のかかなり遅い時間まで議論を続け、ついに、主要課題に関する問題の改善策をレポートにまとめることに成功しました。

(注)「保護司国際研修」とは、保護司の方々に諸外国における犯罪者処遇に関する問題について研鑽を深めていただく目的で、アジ研の春の国際研修及び高官セミナーの期間中、一泊二日の日程で開催されるものです。

4 終わりに

最後の全体討議における海外研修参加者の発言は、「私の国では犯罪者の処罰にのみ関心が向けられているが、社会復帰には注目が払われていない。改善更生という考え方を広め、こうした状況を変えていきたい」、「私の国にも保護司制度のような制度を導入したい」等々、主任教官を鼓舞するものばかりでした。また、グループワークの際に、ある海外研修参加者は、次のような感想を私に語りました。

「私の国では受刑者の大半が、他に生活の術がないため、出所後、テロ組織に加わることになってしまっている。この研修で紹介されていたとおり、もし刑務所の中できちんと職業補導が行われるならば、出所後、そうした者を少しずつにでも減らせるかもしれない。この研修は私たちにそんな希望を与えてくれる。」

研修当初の私の不安をよそに、海外研修参加者は皆、この研修を通じてそれぞれに意義のあるものを確実に学んでいる、そんな手応えを実感できた瞬間でした。